研究論文

特別支援教育専門性向上研修プログラムの開発（２）
－3 つのサテライトキャンパスでの実践－

日野　久美子[*1]　・　井邑　智哉[*2]　・　納富　恵子[*3]　・　中山　健[*3]

Development of special needs education specialization training program (2)
－Practice at three satellite campuses－

Kumiko HINO, Tomoya IMURA, Keiko NOTOMI and Takeshi NAKAYAMA

【要約】

本研究では，特別支援教育専門性尺度（日野他，2019）を元に，「子どもの理解・子どもの指導・子どもの支援・子どもを支える」の 4 つのセッションから成る「特別支援教育専門性向上研修」を，前年度から規模を広げて A 大学の 3 つのサテライトキャンパスで実施した。受講者の回答から本研修プログラムの効果が伺え，演習など教員が相互に高め合う研修と共に，教員の自主的な自己研修を組み合わせることが有効であることが示唆された。

【キーワード】

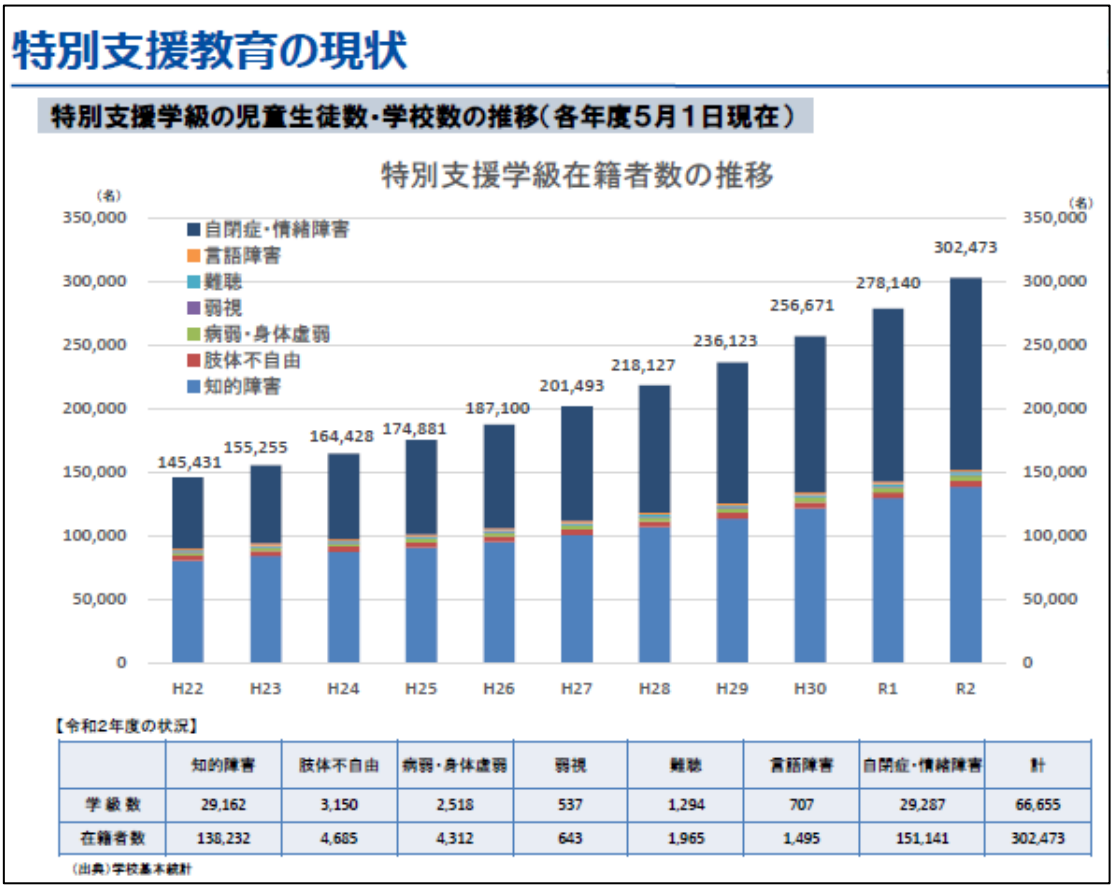
・特別支援教育の専門性　・研修プログラム　・特別支援教育担当教員　・特別支援教育専門性尺度

問題と目的

小・中学校の全体の児童生徒数が減少する現在において，特別支援学級や通級指導教室における，専門的な支援を求める子どもの数は急増しており（図 1．図 2），このような現状に対して様々な事業が進められている（文部科学省，2021）。この背景には，特別支援学校だけでなく小学校や中学校（以下，通常学校）においても，「子ども一人ひとりの教育上のニーズを把握し，学習面や生活面での問題を解決するための指導と支援を行う」（柘植，2013）という特別支援教育の理念の元に，教育が広く行われるようになってきたことがある。これらの子どもや特別支援学級，通級指導教室の増加に伴い，それらを受け持つ小・中学校の特別支援学級担任および通級指導教室担当の教員（以下，特別支援教育担当教員）も増加している（文部科学省，2020）。このような状況の中，学校がかかえる喫緊の課題の一つである特別支援教育への方策を考えるとき，これら特別支援教育担当教員の資質，つまり「特別支援教育に関する専門性」の有無が，大きな鍵を握っているといえる。

特別支援教育に関する専門性について，日野・井邑・納富・中山（2020）は，特別支援教育に関する研修会に参加した教員を対象に予備調査を行い，小・中学校の特別支援教育担当教員の専門性向上のための資質・能力を 9 つのカテゴリーに分類した。これを元に，A 県の公立小・中・高校のうち，特別支援学級及び通級指導教室の設置校の特別支援学級担任及び通級指導教室担当の全教員を対象とし，特別支援教育担当教員の専門性を測定するための特別支援教育専門性尺度を作成し調査を行った結果，「特別支援教育や障害全般に関する知識や理解」「子どもや保護者との信頼関係」「子どもの指導の計画と実践」「教材の作成や活用」という 4 因子が得られた。さらに，日野他（2021）では，これら

[*1] 元佐賀大学大学院学校教育学研究科　[*2] 佐賀大学大学院学校教育学研究科　[*3] 福岡教育大学大学院教育学研究科



	知的障害	肢体不自由	病弱・身体虚弱	弱視	難聴	言語障害	自閉症・情緒障害	計
学級数	29,162	3,150	2,518	537	1,294	707	29,287	66,655
在籍者数	138,232	4,685	4,312	643	1,965	1,495	151,141	302,473

図１　特別支援学級在籍者数の推移

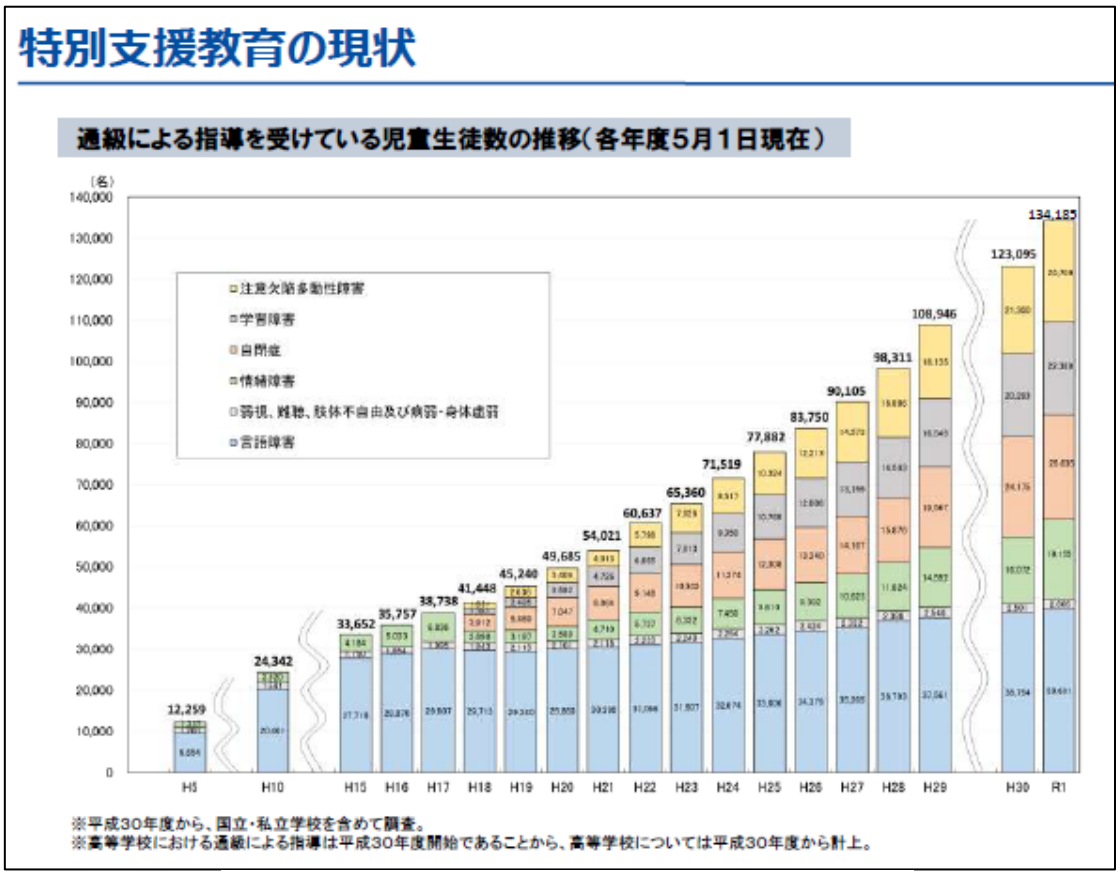


図２　通級による指導を受けている児童生徒数の推移

の 4 因子を元に，特別支援教育担当教員を対象とした特別支援教育の専門性向上を目的とする教員研修プログラム「特別支援教育専門性向上研修 2018」（以下「研修 2018」とする）を計画し，A 大学において実施した。4 つのセッションからなる研修プログラムを一通り実施する中で，3 種類の専門性（特別支援教育や障害全般に関する知識や理解，子どもの指導の計画と実践，教材の作成や活用）が研修後に高まっていた。ただし，これは試行的な研修であったため，参加人数は多くなかった。

そこで本研究では，日野他（2021）で行われた研修をベースとして，研修の会場（A 大学の 3 つのサテライトキャンパス）や時間帯（土曜日の午前午後）を配慮し，より多くの教員が参加しやすい研修「特別支援教育専門性向上研修 2019（前期・後期）」（以下「研修 2019」とする）を行い，よりよい研修プログラムの開発を行うことを目的とする。

なお，本研究は，佐賀大学大学院学校教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けて行った。

方　法

研修プログラムと参加者

「研修 2019」も「研修 2018」と同様に，研修の募集は A 県の教育委員会の教育情報システムを用いて，A 県の全ての公立小・中・高校の特別支援学級担任及び，通級指導教室担当教員を対象に行なった。

教員研修プログラム「特別支援教育専門性向上研修」は 4 つのセッション（セッションⅠ：「子どもの理解（アセスメント）」，セッションⅡ：「子どもの指導（自立活動）」，セッションⅢ：「子どもの指導（自立活動）」，セッションⅣ：「子どもを支える（連携）」）で構成された。「研修 2019」は，セッションⅠ・Ⅱを「2019 前期」，セッションⅢ・Ⅳを「2019 後期」として計画した。一つのセッションは，「①事前学習」と，「②当日研修（2 時間）」及び，「③事後学習」という 3 つを組み合わせて構成した。なお，「①事前学習」と「③事後学習」は受講生の自己学習による。

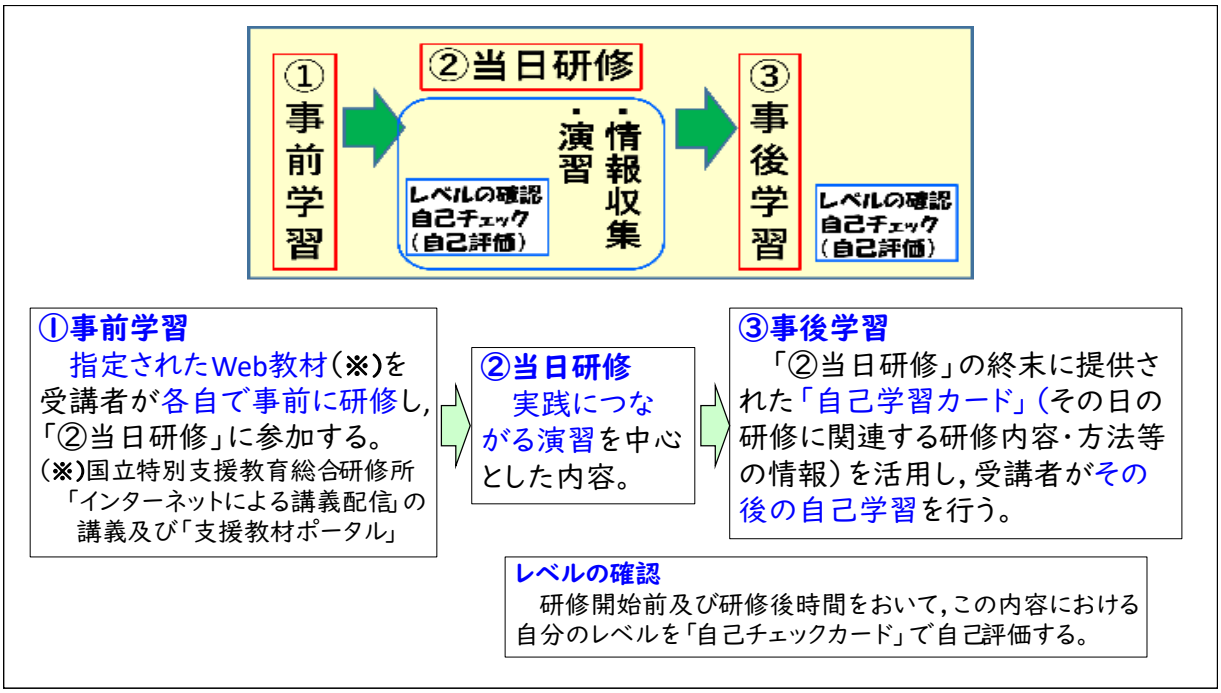


図 3　各セッションの構成

「①事前学習」には，国立特別支援教育総合研修所（以下，特総研）の「インターネットによる講義配信」から指定した講義及び「支援教材ポータル」を利用し，受講者が各自で事前に研修して「②当日研修」に参加するようにした。

「②当日研修」の会場については，「研修 2018」では A 県の中央部に位置する A 大学アクティブラーニングセンター１カ所で行ったが，「研修 2019」では，A 大学教職大学院の県内 X・Y・Z の 3 つのサテライトキャンパスを会場に行うこととして募集した。X・Y・Z 会場はそれぞれ A 県の北部・東部・西部に位置しており，各地域の教員研修等でも良く使用されている施設内にある。この県内 3 カ所の A 大学のサテライトキャンパス（X・Y・Z）において土曜日に行い，「2019 前期」は午前にセッションⅠ，同日午後にセッションⅡ，「2019 後期」も同様に午前にセッションⅢ，同日午後にセッションⅣを行った。「2019 前期」は，X キャンパスで 2019/5/25（土），Y キャンパスで 2019/6/29（土），Z キャンパスで 2019/7/20（土）に実施した。「2019 後期」は X キャンパスで 2019/12/7（土），Z キャンパスで 2019/12/14（土）に実施した（Y キャンパスは 2020/2/15 に計画したが，コロナ感染症対応により未実施）。この研修では，各セッションのねらいに応じて，実践につながる演習を中心とした内容を取り入れて行った（詳しくは日野他（2021）を参照）。各セッションの参加者はⅠ～Ⅳセッション毎に，31，35，13，14 人であった。研修は 4 つあるセッションのうち，自分の希望により複数選択できるようにした。

「③事後学習」については，「②当日研修」の最後のところでに，その日の研修に関連する研修内容・方法等の情報をまとめた「自己学習カード」を提供し，その後の受講者の自己学習につながるようにした。

研修の効果を測るため，各受講生が初めて参加したセッションの前と，セッションⅣ終了の 1 か月後に，全ての受講者に特別支援教育専門性尺度に回答を求めた。また，各セッション終了時には，その日の研修内容に関する受講者の満足度等について，自由記述も含む「研修後アンケート」を求めた。

表１　各セッションの参加人数，開催会場と日程及び研修内容

セッション（因子）参加人数		開催会場と日時	テーマ	研修のねらい	事前学習使用教材※
2019 前期	Ⅰ（第１）31人	X会場：2019/5/25(土)AM Y会場：2019/6/29(土)AM Z会場：2019/7/20(土)AM	子どもの理解（アセスメント）	効果的な指導につなげるための子ども理解のポイントを知る	特総研Web基礎編I102 ＜検査の意義とアセスメント－アセスメントの目的と意義－＞
	Ⅱ（第３）35人	X会場：2019/5/25(土)PM Y会場：2019/6/29(土)PM Z会場：2019/7/20(土)PM	子どもの指導（自立活動）	効果的な指導につなげるための自立活動について知る	特総研Web基礎編0004 ＜(3)学習指導要領と教育課程の編成及び配慮事項＞
2019 後期	Ⅲ（第４）13人	X会場：2019/12/7(土)AM Y会場：2019/12/14(土)AM (Z会場：2020/2/15(土)AM)	子どもの支援（指導の実際）	効果的な指導を行うための教材･教具について選択することができる	特総研支援教材ポータル ･本サイトから教材や事例を検索してみる
	Ⅳ（第２）14人	X会場：2019/12/7(土)PM Y会場：2019/12/14(土)PM (~~Z会場：2020/2/15(土)PM~~)	子どもを支える(連携)	子どもや保護者との信頼関係につながる姿勢や方法を知る	特総研Web専門編0004 ＜特別支援教育におけるカウンセリング技法＞

- X･Y･Z会場は,A教職大学院のA県内サテライトキャンパス
- AM:10時～12時　PM:13時30分～15時30分
- 2019後期のZ会場は未実施

※ 特総研Web教材は2019年度の構成及び内容

セッションI「子どもの理解（アセスメント）」　効果的な指導につなげるための子ども理解のポイントを知ることをねらいとして，子どものかかえる困難さを理解するため，アセスメントに関する基礎的な知識と，疑似体験を通して感じることから，子どもを理解することについて学ぶ（表 2）。

表 2　セッション I の研修計画

1．テーマ	子どもの理解（アセスメント）
2．ねらい	効果的な指導につなげるための子ども理解のポイントを知る
3．研修内容	子どものかかえる困難さを理解するため，アセスメントに関する基礎的な知識と，疑似体験を通して感じることから，子どもを理解することについて学ぶ。 また，担任や担当として必要な障害についての知識を得るための情報を知ることができる。
4．事前学習	（特総研 Web）基礎編 1102 「検査の意義とアセスメント―アセスメントの目的と意義―」 ・アセスメントの目的と意義について，基礎的・基本的な内容について知る
5.当日演習（主な内容・資料）	(1) 事前学習の確認 ・検査器具（WISC-Ⅳ，KABC-Ⅱ，LDI-R，WAVES，STRAW-R，S-M 等）の実物や，医療機関受診時の学校情報提供についての参考資料を知る (2) 本日の演習 ①障害による困難さを体験する（視覚認知と聴覚認知の困難さの疑似体験） ②認知の特性の把握という観点から，自分の担当している障害による困難さについて，話し合いを通して気づく・確認する (3) 事後学習の情報について知る ・教育支援資料，DSM-Ⅴ，就学判断基準　他
6. 事後学習	Appendix 1 参照

セッションII「子どもの指導（自立活動）」　効果的な指導につなげるための自立活動について知ることをねらいとして，特別な教育課程の基本である自立活動を，子どもに応じてどのように組み立てていくか学ぶ（表 3）。

表 3　セッションⅡの研修計画

1．テーマ	子どもの指導（自立活動）
2．ねらい	効果的な指導につなげるための自立活動について知る
3．研修内容	特別な教育課程の基本である自立活動を、子どもに応じてどのように組み立てていくか学ぶ
4．事前学習	（特総研 Web）基礎編 0004 (3) 学習指導要領と教育課程の編成及び配慮事項 ・学習指導要領と教育課程の編成及び配慮事項の基礎的内容について理解する
5.当日演習（主な内容・資料）	(1) 事前学習の確認 ・個別の指導計画・自立活動の指導計画・個別の教育支援計画の関係を確認し自立活動の内容等について学習指導要領解説「自立活動編」で確認する。 (2) 本日の演習 ①各自持参の個別の指導計画・教育支援計画・自立活動計画について、作成にあたっての課題をグループ・全体で共有する。 ②自立活動計画作成のポイントを知ると共に、①の課題解決についても、グループで考え、全体で共有する。 (3) 事後学習の情報について知る ・教育センター研究成果，関連書籍　他
6. 事後学習	Appendix 2 参照

セッションⅢ「子どもの支援（指導の実際）」　効果的な指導を行うための教材・教具について選択することができる」ことをねらいとして，子どもの実態に応じた具体的な指導と評価について，教材の選定・工夫，指導方法などから考える（表 4）。

表 4　セッションⅢの研修計画

1．テーマ	子どもの支援（指導の実際）
2．ねらい	効果的な指導を行うための教材・教具について選択することができる
3．研修内容	子どもの実態に応じた具体的な指導と評価について、教材の選定・工夫、指導方法などから考える
4．事前学習	特総研の「支援教材ポータルサイト」から、教材や事例を検索して支援教材リストを作成してみる ・子どもの困難さに応じた教材・教具の選定の情報源を広げ、選択することができる
5.当日演習（主な内容・資料）	(1) 事前学習の確認 ・支援教材リストに挙げた教材の活用方法をタブレットで具体的に提示し、教材選定のポイント(選定方法・大切にしたいこと・留意事項等)を話し合う (2) 本日の演習 ①大学教員の実践を知ると共に、交流学級や在籍学級でのICT・アプリの活用置き換えて考える。 ②実際にアプリの操作を体験しながら、今後の指導場面における活用の可能性について話し合う。 (3) 事後学習の情報について知る ・教育センター研究成果，関連書籍　他
6. 事後学習	Appendix 3 参照

セッションⅣ「子どもを支える（連携）」　子どもや保護者との信頼関係につながる姿勢や方法を知ることをねらいとして，カウンセリングの基本的な知識や方法について知り，子どもや保護者との信頼関係につなげる方法について学ぶ（表 5）。

表 5　セッションⅣの研修計画

1．テーマ	子どもを支える（連携）
2．ねらい	子どもや保護者との信頼関係につながる姿勢や方法を知る
3．研修内容	カウンセリングの基本的な知識や方法について知り、子どもや保護者との信頼関係につなげる方法について学ぶ
4．事前学習	（特総研 Web）専門編 0004 「特別支援教育におけるカウンセリング技法」 ・カウンセリングの意味とその基本的な方法について知る
5.当日演習（主な内容・資料）	(1) 事前学習の確認 ・事前学習の内容について用語を確認し、特に「コンサルテーション」に関する大学教員の解説を聞く (2) 本日の演習（子どもや保護者との信頼関係づくりを考える） ①言語によるコミュニケーション（保護者・教師・観察者の３役を交代しながら分担し面談を行う） ②非言語によるコミュニケーション（2人での無言のやりとりを通して感じることについて話し合う (3) 事後学習の情報について知る ・アートセラピーの実践例、関連書籍　他
6. 事後学習	Appendix 4 参照

効果評価の査定

各セッション終了時には，その日の研修内容に関する受講者の満足度等について，自由記述も含む「研修後アンケート」を求めた。また，研修の全体の効果を測るための「全体アンケート」を作成し，各受講生が初めて参加したセッションの前と，セッションⅣ終了の 1 か月後に，全ての受講者に対して特別支援教育専門性尺度（日野他, 2020）に回答を求めた。

結　果

まず，各セッションの「研修後アンケート」（得点は 1～4 点）の結果を表 6 に示す。事前学習に関する項目 1，2 では得点が 2.57～2.92 とやや低いが，その他の当日研修に関する項目の結果からは内容の理解度，満足度，力量の向上，事後学習への関与などについて高い点数となった。

次に，セッション I とⅣの両方に参加した受講者を対象として，特別支援教育専門性尺度の得点を研修前（セッション I 開始前）と研修後（セッションⅣ終了の 1 か月後）で比較した（表 7）。その結果，4 つの因子のうち３つ（特別支援教育や障害全般に関する知識や理解，子どもの指導の計画と実践，教材の作成や活用）で有意差が見られ（t (23) = 4.81, p < .001; t (24) = 6.88, p < .001; t (24) = 4.99, p < .001），いずれも研修後の得点が高くなっていた。また，特別支援教育への負担感が研修後には有意に低くなっていた（t (24) = 3.31, p < .01）。

表 6　各セッションに対する受講生の評価

	セッション Ⅰ (N = 31)	セッション Ⅱ (N = 35)	セッション Ⅲ (N = 13)	セッション Ⅳ (N = 14)
1. 示された事前学習に取り組んで本日の研修に臨むことができた。	2.67 (1.07)	2.57 (1.09)	2.85 (1.07)	2.71 (1.14)
2. 事前学習は本日の研修を深めるのに有効であった。	2.71 (0.93)	2.63 (0.87)	2.92 (1.12)	2.92 (1.03)
3. 本日の研修に積極的に取り組むことができた。	3.61 (0.93)	3.50 (0.56)	3.77 (0.44)	3.92 (0.27)
4. 本日の研修を理解することができた。	3.55 (0.51)	3.30 (0.58)	3.38 (0.51)	3.71 (0.47)
5. これまで知らなかった考え方や実践方法を学ぶことができた。	3.35 (0.66)	3.31 (0.80)	3.77 (0.44)	3.92 (0.27)
6. 本日の内容は特別支援教育担当教員が直面する諸状況や課題を取り上げたものであった。	3.48 (0.72)	3.64 (0.59)	3.85 (0.38)	3.86 (0.36)
7. 本日の内容は特別支援教育担当教員としての実践に役立つ内容であった。	3.54 (0.57)	3.64 (0.54)	3.85 (0.36)	3.79 (0.43)
8. 本日の研修を通して今後の教育実践に主体的に取り組む意欲がわいた。	3.51 (0.57)	3.39 (0.60)	3.77 (0.44)	3.79 (0.43)
9. 本日の研修は自身の力量の向上に有効であった。	3.48 (0.57)	3.47 (0.61)	3.70 (0.48)	3.71 (0.47)
10. 事後学習として自分で取り組みたいことがある。	3.67 (0.48)	3.47 (0.61)	3.62 (0.65)	3.64 (0.50)

※ 得点は1～4点

表 7　特別支援教育の専門性に関するアンケート

因子	研修前	研修後	*t*検定結果
第１　特別支援教育や障害全般に関する知識や理解	2.02 (0.58)	2.33 (0.60)	t (23) = 4.81, p < .001 有意差あり
第２　子どもや保護者との信頼関係	2.61 (0.34)	2.71 (0.40)	n.s. 有意差なし
第３　子どもの指導の計画と実践	2.11 (0.50)	2.60 (0.51)	t (24) = 6.88, p < .001 有意差あり
第４　教材の作成や活用	1.99 (0.45)	2.34 (0.43)	t (24) = 4.99, p < .001 有意差あり
※特別支援教育への負担感	2.30 (0.61)	2.01 (0.49)	t (24) = 3.31, p < .01 有意差あり

※ 得点は1～4点

表 8　研修後のアンケート：自由記述より一部抜粋

＜事前学習について＞
- 事前に予習をするスタイルの研修は有効であると思った。
- 特別支援学校での勤務経験がない場合でも基礎的な内容は，ネット配信講義でも十分におぎなえると思う。

＜当日研修について＞
- 子どもの指導，アセスメント，支援，連携などだけでなく，面談に関することや自立活動についてなどとても具体的に学べて良かった。少人数での演習や情報交換が充実していたのもとても良かった。
- 専門性を高めるため研修を欲しているので，またお願いしたい。

＜事後学習について＞
- 目標や計画を立てるのが苦手だが，研修を受け，アセスメントとともに，『課題の整理』をじっくり行えていないからだと気づいた。
- 今後も，具体的な検査，教材，書籍など，紹介してもらえるとありがたい。

考　察

本研究では，日野他（2021）で行われた研修をベースとして，研修の会場（A 大学の 3 つのサテライトキャンパス）や時間帯（土曜日の午前午後）を配慮し，より多くの教員が参加しやすい研修「特別支援教育専門性向上研修 2019（前期・後期）」（以下「研修 2019」とする）を行い，よりよい研修プログラムの開発を行うことを目的として行った。その結果本研究においても，研修前後の特別支援教育専門性尺度の結果から，日野他（2021）と同じように本研修プログラムの効果が確認された。

「研修後のアンケート」（表 8）には，事前学習に関することとして「事前に予習をするスタイルの研修は有効であると思った。」「特別支援学校での勤務経験がない場合でも基礎的な内容は，ネット配信講義でも十分におぎなえると思う。」などの感想が見られた。事前に学習するというスタイルは表 2 の 1 と 2 の結果からも推察されるように，受講者にとって時間的に負担であることも推察できるが，実際に取り組んだ受講者にとっては有効であったと思われる。また，当日研修に関することとして「子どもの指導，アセスメント，支援，連携などだけでなく，面談に関することや自立活動についてなどとても具体的に学べて良かった。少人数での演習や情報交換が充実していたのもとても良かった。」「専門性を高めるため研修を欲しているので，またお願いしたい。」などの記述が見られた。会場には，各種検査器具や教具等の実物を並べて実際に手にとって触れることができるようにしていた。これらをはじめて目にしたり手にしたりする受講者もいれば，すでにある程度使いこなしている受講者もおり，受講者同士での活用に関する質疑応答や情報交換などが熱心に行われていた。事後学

習については表 2 の 10 の結果と共に，「（指導の）目標や計画を立てるのが苦手だが，研修をうけ，アセスメントとともに，『課題の整理』をじっくり行えていないからだと気づいた。」「今後も，具体的な検査，教材，書籍など，紹介してもらえるとありがたい。」などの自由記述が見られた。研修後も高い自己研修意欲と共に，それに応える情報を効率よく入手することが求められている。このように，特別支援教育の専門性を明らかにして，参加している受講者と共有しながら研修を行ったことや，具体的な課題を取り上げ少人数による演習体験や情報交換を行ったこと，教員個人が自分の環境に応じて利用できるネット配信講義の活用などを行ったこと，などがこれらの成果につながったと考えられる。特別支援教育担当教員にとって，同じ課題を抱える教員と相互に高め合う研修と共に，個人の専門性のレベルや関心に応じて自主的に学ぶ自己研修の双方の充実が必要だと思われる。

また，本研究では，日野他（2021）の研修をベースとして，より教員が参加しやすいように，会場や時間帯を増やして開催した。その結果，受講者は各自の都合に応じて受講する研修を選択できたと好評であった。「研修 2018」では平日（水曜日）18 時～20 時という時間帯に比べると，「研修 2019」では土曜日の午前・午後という時間設定により，時間的に余裕を持って会場に出向いた受講者も多かったようである。合わせて，「研修 2018」では県内の中央部 1 カ所の会場が，「研修 2019」では県内の北部・西部・東部と分散していたことで，各受講者の居住地やその他の都合に応じて選択している様子がうかがえた。自己研修の満足感を高めるためには，その内容だけでなく，自分の都合に合わせて選択できるという視点も欠かせないと言えよう。さらに，各サテライト会場には，その会場付近の教育委員会からも参加が見られ，各地域でのこのような研修に対するニーズの高さが感じられた。研修を主催する側の立場も担う教育委員会等と，研修実施に関する情報交換をその地域の実情に応じて行うことは，研修の効果をさらに上げることにつながると考える。

2019 年春から対応を迫られた感染症は，オンライン研修等の普及など研修の在り方についても大きな影響を与えた。このような状況の中，事前学習で活用したようにネット上の教材の利用はますます充実が図られるであろう。例えば，本研究で使用した特総研の各講義資料等は，常に時世に応じた更新や活用法についての改良が行われており，利用価値が高いと考える。一方，「研修 2018」「研修 2019」でも，対面研修の良さ・意義が改めて浮き彫りとなったと言えよう。

日野（2017）は，2001～2016 年までの特別支援教育に関する教員研修についての学術研究から，今後，特別支援教育への期待はますます高まり，通常学校において，特別支援学級や通級指導教室で学ぶ子どもたちはさらに増えていくと考えられること，また同時に，一般教員から特別支援教育担当教員へと立場が変わる教員も多数になると予想し，「教師自身が自信と誇りを持って学校全体の子どもや教職員に接し，校内体制の整備充実に力を発揮できるような，専門性の獲得を目指した研修のあり方についての研究」の必要性を述べているが，本研究からも，研修の機会があれば自分の資質・能力を高めたいと考えている教員は多いことが明らかになった。今後，教員の自主的な学びを念頭に置き，様々な形態の研修を考えることは，このような教員の研修機会を増やし，その資質・能力を高めることにつながると考える。

＜付記＞
ご協力くださいました先生方に深く感謝申し上げます。
なお，本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業（課題番号 17K18655）の助成を受けた。

Appendix 1. 事後学習で用いる「自己学習カード」（セッションⅠ）

自己学習カード　【セッションⅠ：　2019前期　】　氏名(　　)　受講会場（ X ・ Y ・ Z ）

	研修の主なねらい	事後の自己学習　参考資料　（※）…本日の研修で紹介			メモ （やってみたいこと・やったことなど）
1	・効果的なアセスメントができる。	○各種検査（例）（※） ・田中ﾋﾞﾈｰ：個別知能検査、精神年齢･生活年齢の比較 ・WISC-Ⅳ：個別知能検査、言語理解等多面的に把握 ・KABC-Ⅱ：認知特性(同時処理･継次処理)と習得度 ・LDI-R：ＬＤのスクリーニング（教師が記入） ・S-M：社会生活能力（教や保護者が記入） ・WAVES、STRAW：読み書きの能力 ・	○日頃の観察のポイント ・身辺自立の状況 ・ノートや作品、提出物 ・行動（困難な様子） ・友だちや教師との関わり ・休み時間の過ごし方　　など ○引き継ぎ情報 ・保護者からの聞き取り ・専門機関からの情報 ・個別の教育支援計画や指導計画	○特総研ネット配信講座（※） ・基礎編： ・専門編：	
2	・専門機関（医療や福祉など）につないだり、自分がつながったりして連携をとることができる。	○情報交換のツール ・受診時の情報提供例 ・アセスメント依頼時の情報収集様式例	○専門機関の情報 ・医療 ・福祉 ・行政	○特総研ネット配信講座（※） ・基礎編： ・専門編：	
3	・自分の担当している障害種の特性や困難さを理解している。	○障害の定義や診断 ・教育支援資料（※） ・DSM-V ・ICD-10		○特総研ネット配信講座（※） ・基礎編： ・専門編：	

Appendix 2　事後学習で用いる「自己学習カード」（セッションⅡ）

自己学習カード　【セッションⅡ：　2019前期　】　氏名(　　)　受講会場（　X　・　Y　・　Z　）

	研修の主なねらい	事後の自己学習　参考資料　（※）…本日の研修で紹介		メモ （やってみたいこと・やったことなど）
1	・個別の指導計画や教育支援計画を作成することができる。	・小学校学習指導要領　・中学校学習指導要領　各教科解説 ・特別支援学校　幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領（※） ・宮﨑英憲 「平成29年度版学習指導要領改訂のポイント」 特別支援学校　明治図書　2017（※） ・上野一彦 「平成29年度版学習指導要領改訂のポイント」 通常の学級の特別支援教育　明治図書　2017（※） ・佐賀県教育センター トップ ＞ 相談・支援 ＞ 特別支援教育 ＞ 個別の指導計画 ・佐賀県教育センタートップ ＞ 相談・支援 ＞ 特別支援教育 ＞「個別の教育支援計画」作成支援ソフト ・佐賀県教育センタートップ ＞ 授業に役立つ実践研究 ＞29年度の研究成果 小・中学校 特別支援教育 「小・中学校におけるインクルーシブ教育システム構築のための取組　－個別の教育支援計画及び個別の指導計画を活用した合理的配慮の実践－（２年次／２）」	○特総研ネット配信講座（※） ・基礎編： ・専門編：	
2	・自立活動の指導計画を作成することができる。	○特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」（※） ・図２（流れ図）p28-31（※） ・図２をふまえた例示（図3～図15）p32-39 ・配付資料（PP資料）（※） ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 平成26～27年度専門研究Ｂ「特別支援学級における自閉症のある児童生徒の自立活動の指導に関する研究」リーフレット（※）	○特総研ネット配信講座（※） ・基礎編： ・専門編：	
3	・自立活動の指導を行うことができる。	・月森久江「教室でできる特別支援教育のアイデア」小学校編　他各種 図書文化 ・藤田和弘「長所活用型指導で子どもが変わる」Part１～５　図書文化 ・山本淳一「応用行動分析で特別支援教育が変わる」図書文化 ・上野一彦「実践　ソーシャルスキルマニュアル」明治図書　2006 他　書籍多数有り	○特総研ネット配信講座（※） ・基礎編： ・専門編：	

Appendix 3　事後学習で用いる「自己学習カード」（セッションⅢ）

自己学習カード　【セッションⅢ：　2019後期　】　氏名(　　)　受講会場（ Ｘ ・ Ｙ ・ Ｚ ）

	研修の主なねらい	事後の自己学習　参考資料　　(※)…本日の研修で紹介		メ モ
1	・子どもの特性に応じた教材の作成や選定ができる	・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 関連リンク ＞ 支援教材ポータル ＞ 教材・支援機器を探す ＞ 実践事例を探す ＞ 教材・支援機器に関する情報 ・（岩手県立総合教育センター：発音指導教材・タブレット学習用Webアプリ他） ・（神奈川県立総合教育センター：かながわ授業のタネ）	○特総研ネット配信講座 （※） ・基礎編： ・専門編：	
2	・子どもの指導方法の一つとして、ＩＣＴ教具を活用することができる。	・（愛知県総合教育センター：自作教材教具集） ・（滋賀県総合教育センター：特別支援教育） ・（京都府総合教育センター：特別支援教育＞研究・教育コンテンツ＞ タブレット端末を活用した教育実践データベース） ・（福岡県教育センター：特別支援教育部特別支援教育教材・教具動画コンテンツ） ・（長崎市教育研究所：へ生26年度特別支援教育リーダー研集会～自作教材作成例～） ・佐賀県教育センター トップ ＞ ＩＣＴ利活用支援	○特総研ネット配信講座 （※） ・基礎編： ・専門編：	

Appendix 4　事後学習で用いる「自己学習カード」（セッションⅣ）

自己学習カード　【セッションⅣ：　2019後期　】　氏名(　　)　受講会場（ X ・ Y ・ Z ）

	研修の主なねらい	事後の自己学習　参考資料　　(※) …本日の研修で紹介		メ　モ
1	・子どもとの信頼関係を作ることができる	○アートセラピー　(学校での実践例) ・佐賀県教育センター ＞ 授業に役立つ実践研究～学力向上支援～ ＞ これまでの研究成果へ　授業に役立つ実践研究 ＞ 平成１６年度の研究成果 ＞ 小学校教育相談・生徒指導「言葉より、まず心の対話～話さない、話せない、話したがらない子へのアプローチ」 高等学校教育相談・生徒指導「やってみよう！すぐ使える不登校生徒へのアプローチ法 ○書籍 ・品川裕香「心からのごめんなさいへ」中央法規　2005 ・小泉吉宏「コブタの気持ちもわかってよ」幻冬舎　2002	○特総研ネット配信講座 ・基礎編： ・専門編：	
2	・障害のある子どもを育てる保護者を理解し、信頼関係を作ることができる	・山形県教育センター ＞「子供のよりよい成長のためにつなぐ・つながるための保護者連携ハンドブック」 ・日本ペアレント・トレーニング研究会 ＞ 研究会の活動と文献情報 ・「LD、ADHD＆ASD　No58　7月号　特集＝保護者と協力して子どもを支えよう」明治図書　2016.7.1　(※) ・たばた せいいち「さっちゃんのまほうのて」偕成社 1985	○特総研ネット配信講座 ・基礎編： ・専門編：	

引用・参考文献

韓　昌完，小原愛子，上月正博（2014）: 特別支援教育成果評価尺度（SNEAT）の開発．A*sian Journal of Human Services*, **7**, 125-134.

日野久美子（2017）: 通常学級における現職教員の支援方策としての研修に関する問題．特別支援教育の到達点と可能性－2001～2016 年:学術研究からの論考－，232-235．金剛出版

日野久美子・井邑智哉・納富恵子・中山健（2018）: 通常学校の特別支援教育担当教員の専門性向上のための教員研修に関する研究－教員の特別支援教育に関する専門性の資質・能力についての分類－．佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要. **2**．40-49.

日野久美子・井邑智哉・納富恵子・中山健（2019）: 教員の特別支援教育に関する専門性の資質・能力についての分類 －専門性の高い教員を対象とした調査から－ .佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要. **3**．92-97.

日野久美子，井邑智哉，納富恵子，中山　健（2020）: 特別支援教育専門性尺度の作成と検討．　佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要, **4**, 10-17.

日野久美子・井邑智哉・納富恵子・中山健（2021）:特別支援教育専門性向上研修プログラムの開発 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要. **5**．81-92.

本間 貴子, 稲本 純子, 田丸 秋穂, 氣仙 有実子, 鎌田 ルリ子, 米田 宏樹（2019）: 文部科学省中央教育審議会答申・報告にみるインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育教員研修の動向，筑波大学学校教育論集,**41**,39-50.

保坂俊行, 保坂美智子（2008）: LD 等の発達障害の理解のための疑似体験ワークショップにおける「新版 LD･ADHD 等の心理的疑似体験プログラム」の検討―参加者による評価アンケートの分析―．LD 研究，**17**（3）,374-383.

保坂俊行, 保坂美智子（2014）: LD 等の発達障害の理解のための疑似体験ワークショップにおける「新版 LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラム」の検討―参加者による自由記述を含めた評価アンケートの分析―．LD 研究，**23**（2），187-198.

文部科学省中央教育審議会（2012）: 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申），文部科学省

文部科学省（2020）: 特別支援教育資料（令和元年度），文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/20200916-mxt_tokubetu02-000009987_02.pdf（2021.1.10 閲覧）

文部科学省（2021）: 特別支援教育行政の現状及び令和３年度事業について，文部科学省
http://www.rehab.go.jp/application/files/5216/1550/6855/2_.pdf（2022.1.9 閲覧）

岡本邦広（2017）: 障害のある子どもの指導･支援に関する研修の研究動向. 特殊教育学研究, **55** (4),233-243.

迫田裕子，納富恵子，吉田茂孝（2014）: 特別支援教育にかかわる教員の研修ニーズに関する研究―教職キャリア段階と特別支援学級・通級指導教室担当経験の有無に着目した分析―．福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, **4**, 17-24.

Sharma, U., Loreman, T., Forlin, C. （2012）: Measuring teacher efficacy to implement inclusive practices. *Journal of Research in Special Educational Needs*, **12**, 12-21.

竹林地毅（2014）: 小学校特別支援学級担当者の専門性向上に関する調査．広島大学特別支援教育実践センター研究紀要，**12,** 75-82.

柘植雅義（2013）: 特別支援教育－多様なニーズへの挑戦－．中公新書.

柘植雅義，飯島知子，中山　健（2009）: 教員養成系大学学部生向け「特別支援教育に関する授業」の効果に関する実証的研究—現職教員向け研修会の効果と比較して—．兵庫教育大学研究紀要, **35**, 65-77.

渡邊雅俊（2016）: 特別支援教育教員養成課程に在籍する大学生の教師効力感の特徴—知的障害児対応教師効力感による検討—．國學院大學紀要, **54**, 73-85.

（2022 年 1 月 28 日　受理）